

結び目としての神経 —シュレーバーにおける宇宙と身体—

熊谷 哲哉

1. 「神経病者」シュレーバー

ダニエル・パウル・シュレーバー（1842～1911）の残した唯一の著書『ある神経病者の回想録』（1903）¹は、これまでに、フロイトによる論文「自伝的に記述されたパラノイア〈早発性痴呆〉の一症例について」（1911）を皮切りに、精神分析の観点から、またはカネッティやゾンバルトらに代表される現代文化論の視点から多く論じられてきた。これらの先行研究は、シュレーバーを、現代を代表する「病者」として描き、『回想録』の記述を通して、現代社会が直面するさまざまな病理についての理解を深めたといえるだろう。しかしながら、シュレーバーを単なる病者として、精神病のモデルケースとして扱うことは、彼の著作じたいを評価することにはならない。たしかにフロイト、ラカンらによる精神分析は、病者のディスクールから私たちの言語がおかれた根本的な状況を探りだしたが、シュレーバーの 500 ページを超える膨大なテキストに登場するひとつひとつのモチーフの意味や来歴については、いまだ解明されていない点も数多く残されている。

シュレーバー本人は、著書のタイトルからもわかるように、みずから「神経病者」を名乗っていた。「神経病者」とは、なんだろう。どのような意味で「神経」を「病」んでいるというのだろうか。シュレーバーは、『回想録』に収録された「禁治産宣告取り消し訴訟の記録」の控訴理由書において、「精神を病んでいる」という意味での精神病者として扱われることにはげしく反論している。

これは不当である。というのも、一般的にみられることだが、精神病という言葉には、悟性の混濁という観念が結びついており、こういった意味で私が精神病であるということには、断固として反駁する。（中略）

¹ 『ある神経病者の回想録』は、以下『回想録』（DW）と略記する。引用は、Schreber, Daniel Paul: *Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken*. Gerd Busse (Hrsg.) Gießen 2003 による。

私は、申立書で、自分が神経病という意味での精神病という状態にあるということについては反駁しない、と述べた。しかしながら私はまた、「精神病」という語が、法的な意味で医学者に対するのとは異なった意味を持っていることをも、すでにはつきりと指摘してきた。(DW 405)

シュレーバーがみずから名乗る「神経病者」とは、このように、きわめて明確に定義された限定的な意味での「神経の病」を患う者のことである。² では、具体的に、シュレーバーはどのように「神経」を病んでいたというのか。

シュレーバーの病とは、自らの神経が神との異常な接続状態に置かれ、昼夜を分かたずことなく、神や死者の魂たちからの声を聞き続けるよう強要され、³ また神によって「女性神経」を挿入されることにより、身体が女性へと変化し、最終的には神に性的に濫用される、あるいは神の妻となり新たな人類の創造を行う者となる、という『回想録』全体を覆いつくすような、壮大な内容を持った神経の病である。

シュレーバーの「神経病」は、先ほどの引用でもみたように、通常の医学的——あるいは法医学的な——意味とは別の意味で、精神の病を指している。それでは、シュレーバーの壮大な著作が書かれる要因となった、彼の神経とは、いったいどのようなものだったのだろうか。私たちににとって神経とは、視神経や反射神経といった語から連想されるように、外界からの刺激を受容し、それに対して働きかけるための信号を発する器官であると同時に、血管や筋肉や骨のように、全身に網の目のように張り巡らされた、身体を構成する根本的な一要素であると考えられる。このような私たちの一般的な神経についての理解と、シュレーバーにおける神経とはどのように異なっていたのだろうか。また、シュレーバー自身は、どのような知的背景から、『回想録』に詳細に書き込まれた神経についての知識を得てきたのだろうか。

本論稿では、シュレーバーの『回想録』におけるキータームのひとつである神経に着目し、シュレーバーの知的背景をさぐると同時に、シュレーバーの記述が、同時代のどのような身体や神経についての言説と結びついているのかを考察することにより、彼の生きた世紀転換期における、ひとつの身体観を提示することを試みる。

² シュレーバー自身も「私は、ここ数年来私の神経が病的な状態にあるということに反駁しない」とはっきり述べている。vgl. Schreber, ebd.

³ 『回想録』における、音声的な要素（すなわち神や魂たちの発する声や罵言）と言語の関係については、拙稿「言葉をめぐるたたかい シュレーバーと雑音の世界」：京都大学大学院独文研究室「研究報告」18号（2004年）、23～36頁所収を参照。

2. シュレーバーと神経病と世紀転換期

裁判官としてザクセン各地で活躍したシュレーバーが、ちょうど壮年期を迎えた 19 世紀後半という時代は、まさに神経病の時代であったといえることができる。ヨアヒム・ラドカウによれば、「神経衰弱」という病名が一般的に使用され始めたのは、1880 年代のことだといふ。⁴ ドイツにおけるダーウィニズム流行の中心人物の一人でもあるエルンスト・ヘッケルは、『生命の不可思議』において、「蒸気機関と電気技術の時代」にわれわれは膨大な「神経エネルギー」を消耗し、「われわれの脳は百年前よりもずっと強く緊張させられ、消耗され、その体はひどく刺激を受け、過労を強いられている」と述べている。⁵ ヘッケルが指摘するとおり、神経衰弱に罹患する恐れが非常に高かったのが、電話交換手や新聞社の植字工といった、この時代に急速に普及し発展したテクノロジーを前衛で担う人々であった。⁶ また、民俗学者の川村邦光は、明治期の日本に流布した神経病や脳病——そこにはむしろ、「狐憑き」など日本固有の神経症的現象という背景も考えられるが——についての言説や薬の広告、解剖図などが、ひとびとの不安に名前を与え、脳や神経というイメージのもとに、その不安を方向付けた、つまり「病み方」を教えたのだと指摘している。⁷

このような状況は、シュレーバーの『回想録』にどのように反映しているのだろうか。シュレーバー自身は、『回想録』冒頭で、神経を以下のように定義している。

人間の魂は身体の神経に宿っている。その物理的性質について、素人の私が言えるのは、ただ神経が——きわめて細い燃り糸にもたとえられるような——非常に繊細な構成物であり、外的な諸印象によって刺激を受ける能力にこそ、人間の精神生活全体の基盤があるということだけである。(DW 6)

シュレーバーにおける神経という語は、わたしたちが一般的に使用する以上に多義的である。ここでシュレーバーがいう、「外的な諸印象によって刺激を受ける能力」とは、私たちにとってもそれほど違和感があるものではない。しかしながら、シュレーバーの考える神経は、ただ印象を受容するだけではない。受容したさまざまな情報を保存したり、保存した情報を編集す

⁴ Radkau, Joachim: *Das Zeitalter der Nervosität Deutschland zwischen Bismark und Hitler*. München / Wien 1998, S.9. 「神経衰弱」(Neurasthenie) という語は、もともとアメリカの神経医学者ジョージ・M・ベアードによるものであり、のちにヨーロッパに伝わり、昔から存在した不安心理、無気力、不眠などの症候群を一括して「神経衰弱」という病名のもとに表象するようになった。

⁵ Haeckel, Ernst: *Die Lebenswunder*. Leipzig 1923, S.95.

⁶ 竹中亨『鼎依する世紀末 ドイツ近代の原理主義者群像』ミネルヴァ書房 2004 年、10 頁。

⁷ 川村邦光『幻視する近代空間』青弓社 1997 年、120 頁。

することもできる。⁸ つまり、私たちが考える脳の記憶や想像といった機能をも担っているのだ。また、世界の創造者である神は、「身体を持たない、神経そのもの」であり、人間と異なり、その神経は無限に存在するとされている (DW 8)。神がその神経の能力、つまり創造することや、人間たちに啓示を与えるといったことは、光線として行われるという。この光線としての神の言葉が、シュレーバーに伝えられているのだ。

神がシュレーバーの神経へと語りかける言葉は、通常の間が意識することのできない「神経言語」と呼ばれる独自の言語方式である。

ふつうの人間の言語のほかにも、通常の健康な人間には意識されることのない、神経言語というものがある。私の考えでは、これについての最も分かりやすいイメージを得るには、いくつかの単語を決められた順序で記憶に刻み込もうとするときの過程、つまり、たとえば学校で子供が、詩を暗唱するときとか、聖職者が教会で行う説教をそらんじるとき、といった過程を思い浮かべればよいだろう。そういった言葉は、このような場合、声に出さなくて暗唱される (これは、説教壇から聴衆に要求される黙祷の場合と同様である)。すなわち、人間は、このような言葉を使用するのに適合するような同じ振動を引き起こすように、神経に働きかけるのだが、その際本来の音声器官 (唇、舌、歯など) は、ほとんど動かないか、動かされるにしても、偶然によるものでしかない。

正常な (世界秩序にかなった) 状況のもとでは、この神経言語を使うことは、もちろんその神経を持つ、本人の意思にのみ、左右される。誰も他人に、神経言語を使うよう強制することはできない。しかし私は、上述の神経病の危機的な展開以来、私の神経が外部から、しかも絶えることなくひっきりなしに、動かされるという状況になったのだ。(傍点は原著者) (DW 46)

シュレーバーがみずからの神経が外的な力によって動かされている、という事態は、先述したとおり、この神経言語による、神経への介入、すなわち思考の攪乱にはじまり、身体の寸断や女性化へといたるさまざまな形での迫害へとつながるのである。

ここまでシュレーバーにおける神経という概念についておってみたが、とりわけ特徴的なのは、それが神の言葉を受信する器官として機能しているということである。そして、シュレー

⁸ このような働きをする神経は「恒性神経」とよばれる。恒性神経は記憶だけでなく、人間の思考や意思決定などの活動も同時にになっており、そこに書き込まれた記憶こそが、ひとりの人間の個性と対応しているのだとシュレーバーは述べている。(DW 6)

バーのもとにやってくる外部からの言葉（それは神の神経言語のみならず、神の世界を構成する使者の魂たちの声でもある）が、神経を通じてその身体を破壊し、改造してしまうという点である。冒頭の引用からも分かるように、シュレーバーは積極的に医学の知識を取り入れ、みずからの「神経病」が何であるかを考えようとしてきた。次節では、シュレーバーがどのような書物からその知識を得たのかというところから、シュレーバーが身体をどのように捉えていたのかを考察する。

3. 体操する身体、父シュレーバーの身体論と精神主義

シュレーバーの知的能力について、禁治産宣告取り消し訴訟の記録のなかで、鑑定医のヴェーバー博士は以下のように述べている。

はじめに、何度も繰り返し言うておくべきであるが、パラノイア患者に多くみられるように、この患者もまた、知性や形式的な論理的思考を構成する能力にはなほだしい障害をこうむっているようには見受けられないということである。患者は多くの観念を自由に操ることができるし、それらを秩序立てて表現することもできる。それだけでなくまた、その思慮分別においても曇りはない。(DW 397)

引用するまでもなく、シュレーバーの豊富な知識や明晰な知性については、『回想録』および、その末尾に付けられた「精神病とみなされる人物の医療施設での拘禁は、当人がそれを拒否するはっきりとした意志を表明している場合、どのような前提条件があればゆるされるか」というタイトルの論文や、訴訟の記録をみれば、明らかである。それでは、具体的にシュレーバーがどのような本を読んできたのか、またどのような知識を背景として『回想録』を執筆したのだろうか。このことについては、シュレーバー自ら以下のように語っている。

しかしながら、私が病気になる前のおよそ 10 年の間に読んだ哲学的・自然科学的な内容を持つ著作の中には、何度も繰り返し読んだものもあり、そのうちのいくつかをここで挙げておきたい。というのも、これらの著作に含まれる思想が、この論文に反映しているのを見出すことができるだろうからである。それはたとえば以下のような著作である。ヘッケルの『自然創造史』、カスパリの『人間の原史』、デュ・プレルの『宇宙の発達』、メードラーの『天文学』、カールス・シュテルネの『生成と消滅』、ヴィルヘルム・マイヤーの雑誌『天と地の間』、ノイマイヤーの『地球の歴史』、ランケの『人間』、エドゥアルト・フォン・ハルトマンのいくつかの哲学論文とりわけ『現

代』に掲載されたものなどである。(DW 36)

この引用から分かるように、シュレーバーがとりわけ関心を持っていたのが、宇宙論や自然史、進化論や心靈学など、当時広く流行した知識であった。このような分野だけでなく、シュレーバーはまた最新の医学にも関心をもっていて、精神病理学の確立者の一人であるクレペリンの教科書を参照したり、⁹ 医学的な知識に照らしても自分の病気はパラノイアではないと主張したりしている (DW 355)。

また、彼自身の父であり、医師・教育家・保健思想家として現在もシュレーバー庭園に名前を残すダニエル・ゴットロープ・モーリツ・シュレーバー (1808～1861) についても言及している点を見落とすことはできない。『回想録』によれば、父の魂は、ある種の医学的な助言を与えることができた、という。¹⁰ その具体的な内容については触れられていないが、別の箇所では、父シュレーバーの代表的な著作『医療的室内体操』¹¹ にも言及している。¹² ここでシュレーバーが参照したとされるページを見ても、それがシュレーバーの病にどのように関

⁹ シュレーバーは、病院内で閲覧が許されているクレペリンの『精神医学教科書』を読み、みずからの経験している外的な声が幻聴であるとの記述を見つけ、それを批判している。「他方では、(以前になされた経験によって、新しく現れた観念を明敏かつ徹底的に修正するにあたっての患者の無能力) 146 頁、それからクレペリンが、(例外的ない) 妄想観念の随伴現象として書いている(判断力の衰弱) といったことは、私においては、この著作の全体的な内容をみれば、ほとんど見出すことができないであろう。私の場合(確固たる思考秩序とすでに獲得された観念との記憶ののっとりした統制) だけでなく、(判断と推論の助けを借りて、意識内容を批判的に訂正する能力) もまた極めて鋭敏なまま存在していることを証明して見せたと思う。これに対して、クレペリンが 146 頁で云うような意味で(健康な経験) という名の下に、あらゆる超感覚的な物事を否定して、理解しようとする人は、私の考えによれば、ただ 18 世紀の啓蒙主義時代の浅はかな(合理主義的観念) に感わされているにすぎないという批判を受けてしかるべきである。」(DW 79)

¹⁰ 「先ほど言及した事態において、とくに興味深かったのは、ユリウス・エミール・ハーゼの魂が、彼の人生の中で会得した科学的な経験によって、医学的な助言を与えることもできたということである。私の父についても、私はこの機会に付け加えておきたいのだが、ある程度事情は同じであった。」(DW 96) ここで登場するハーゼとは、パウル・シュレーバーの母方の祖父でライプツィヒ大医学部教授であった、ヴィルヘルム・A・ハーゼであると考えられる。

¹¹ この著作は広く読まれ、多くの言語に翻訳され版を重ねており、その数は 1900 年ごろまでに 32 版、30 万部を超えていたといわれる。Israëls, Han: *Schreber: Father and Son*. Madison 1989, S.240. また、心身の虚弱から大学の職を辞していたニーチェも『医療的室内体操』(第 15 版、1877 年)を参照して、身体を増強に努めたという。Käser, Rudolf: *Arzt, Tod und Text*. München 1998, S.193.

¹² 「ベッドに寝る際に、男性は横向きに、女性は仰向けに横たわる、(いわば“受け入れる側”)としてつねに性交の際に合致した状況にある) ということを魂たちはよく知っていた。これまでの生活で、このようなことにまったく注目してこなかった私は魂たちから初めて教わったのである。この問題については、たとえば私の父の『医療的室内体操』(第 23 版、102 頁)を読んでみたが、医師たちでさえ、こういった問題には、詳しくなかったようである。」(DW 166)

連しているのかはよくわからない。しかしながら、これらのことを鑑みて、シュレーバーの『回想録』および彼自身の教養形成に、父の思想が少なからぬ影響力を持っていたことはうかがい知ることができよう。

モーリツ・シュレーバーという人物は、これまでパウル・シュレーバーの精神病にとって直接的な影響を与えたサディスティックなスバルタ教育者であるとされてきた。その見方の代表的な例としてシャッツマンやニーダーランドを挙げることができる。¹³ シャッツマンは、モーリツ・シュレーバーの考案したさまざまな骨格矯正器具が、パウル・シュレーバーの妄想におけるさまざまな苦難として現れていると考え、『回想録』第 10 章を中心に述べられている身体の損傷——頭部を締め付けられたり、姿勢を固定されたり、内臓を抜き取られたり——がほとんどモーリツ・シュレーバーの教育によるものであることを示した。¹⁴ シュレーバーの教育には、たしかに子供の身体を拘束して真直ぐな身体を形成しようという意志があった。シャッツマンはそれを息子の精神病と直接的に結び付けているが、そのような関係付けがどれほど妥当なものなのかは定かでない。

このような見解に対して、近年のイスラエルスやレートシュルテ、三井悦子らの研究により、シュレーバーの身体論は、再評価がなされている。イスラエルスは、シュレーバーが考案した骨格矯正器具は、あくまで骨格異常の児童に用いられるものであり、日常的な使用——息子への強要——を視野に入れたものではないと指摘している。¹⁵ むしろシュレーバー本人は、従来の器具や体操療法士の助力に頼るスウェーデン式医療体操には批判的であり、誰もがひとりで、どこでもできる体操を目指していた。¹⁶ 『医療的室内体操』には、体操の効用だけでなく、彼自身の保健思想が明確に示されている。

モーリツ・シュレーバーは、人間とは、精神的および肉体的な自然が、内的に結合した二重の存在であり、文明化した社会では、この肉体的な側面が貧困化していると考えている。それゆえに、体操による身体の鍛錬を通じて、精神を活性化し、さらに高次の結合へと至るべきであるというのだ。¹⁷

『医療的室内体操』には、このようなシュレーバーの身体論だけでなく、さまざまな疾病や

¹³ モートン・シャッツマン『魂の殺害者』（岸田秀 訳）草思社 1977 年および, Niederland, William G.: *Der Fall Schreber*. Frankfurt a. M. 1978 を参照。

¹⁴ たとえばシャッツマンは、『回想録』におけるシュレーバーの頭痛についての記述と、モーリツ・シュレーバーの考案した頭部固定器についての記述を対照し、両者の因果関係を明示しようとしている。（シャッツマン前掲書、68、69 頁。）

¹⁵ Israëls, S.87.

¹⁶ Neuendorff, Edmund: *Geschichte der neueren deutschen Leibesübung, Bd. IV. Die Zeit von 1860 bis 1932* Dresden. o. J., S.44.

¹⁷ Schreber, D.G.M.: *Ärztliche Zimmerymnastik* Leipzig 1894, S.13.

症候に対する処方箋、あるいは体操による治療プランが多数収録されている。パウル・シュレーバーが参照していた「病的で衰弱をとまなう夢精の頻発に対する処方箋」のページでは、17種類の運動とその回数を示したのちに、以下のように述べている。

とりわけ重篤な場合には、以下のような方法が推奨に値する。寝る前に7、8分の間、列氏10度から12度程度の冷水に半身浴し、できるだけ長く体内にとどまる（それゆえ余り大量でない）水洗腸をするのがよい。そして夜には、例外的に仰向けに寝る代わりに左右ときどき姿勢を変えながら横向きで寝るのを習慣とすべきである。そして夜ではなく、朝に、性器や会陰部を冷水で洗うこと。¹⁸

また、神経症については、神経症とは「血流の抵抗を征しようとする無意識的な働き」であると考え、そのような意志の及ばないところでの精神の働きを助けるために、体操やマッサージ、水療法、乾布摩擦などを行うべきであるとしている。¹⁹

シュレーバーの言葉を補うように、ともに「ライプツィヒ体操協会」の設立に尽力した医学部教授のカール・ボックは、「筋肉や腱は、単に力や巧みさを産出し、多くは生命を維持する義務を助けるのみならず、脳の協力により、堅固な意志力や意志の強靱さを形成することもできる」と述べている。²⁰ ボックも、シュレーバーと同様に、精神面での鍛錬のために、体操を奨励しているのだ。ボックの云う意志や意志力とは、19世紀前半のロマン主義医学思想におけるキータームのひとつであった。治療ニヒリズムともいわれる待機療法（何もしないで放置しておく治療法）に反発した、ヴィーンのエルンスト・フォン・フォイヒタースレーベンが、『魂の修養』において意志力こそが、あらゆる疾病に対抗する力となりうることを訴えた。²¹

フォイヒタースレーベンの師であるカール・フィリップ・ハルトマンは、『至福への教え』²²のなかで、日常生活——住まいから性生活、子育てにいたるまで——における健康になるための詳細の教えとともに運動療法についても触れている。同書は1808年に出版されたが、のち

¹⁸ Ebd., S.102.

¹⁹ Ebd., S.113.シュレーバーの『医療的室内体操』は、ここで挙げたように、体操だけでなく水療法やマッサージなど他の代替医療をも実施するよう勧めている。さきほどの引用に出てきた水洗腸のような治療法がどれほど有効であったかは定かでないが、すくなくともシュレーバーが勧める代替医療は当時話題となっていたクナイプの水療法やホメオパティのように、多くの人々の期待を集めていたし、大学における医学教育にも取り入れられ始めていた。Vgl. Lesky, Erna: *Die Wiener Medizinische Schule im 19. Jahrhundert*. Graz / Köln 1965, S.338.

²⁰ Bock, Carl Ernst: *Bau, Leben und Pflege des menschlichen Körpers*. Leipzig 1884, S.26.

²¹ Feuchtersleben, Ernst von: *Zur Diätetik der Seele*. Halle a.d.S. 1848, S.19ff.

²² Hartmann, Karl Ph.: *Glückseligkeitslehre*. gänzlich umgearbeitet und vermehrt von Moritz Schreiber. Leipzig 1881.

にモーリツ・シュレーパーによる増補改訂版が出されている。ハルトマンの著書は、シュレーパーの保健思想の源泉のひとつであったと考えることができよう。ハルトマンは、人間に必要なのは、「空気と光と運動」であるとして、毎日 30 分の体操を励行している。²³ ハルトマンの体操が目指したのは、身体と精神の一致であり、それは運動による身体の鍛錬を通じてもたらされるというのである。

三井悦子は、シュレーパーの体操推奨論が、従来受動的・静的に捉えられていた身体を解放したと述べている。²⁴ これまでたんなる治療の対象として、器具や装具によって、曲げられ、伸ばされしてきた身体は、徒手体操を通して、はじめてこれから解き放たれ、みずから意識し、自由に活動する身体を発見したのだという。これをさらに進めれば、身体の増強が、身体の解放、ひいては精神力の強化へとつながり、肉体と精神の一致した健康状態に達するのだと考えることができるだろう。シュレーパーの目指した地点は、肉体と精神の一致、両者の均斉が取れた関係なのだろうか。先の神経症の治療についての言及から、彼の目的が、身体の活性化を通じて、血液の流れのような不随意の領域をも精神力の影響下におくことにあったと考えられるだろう。²⁵

4. 拡大する精神と宇宙

父シュレーパーにおける、身体の見えを通じたさらに強固な精神主義は、息子パウル・シュレーパーにおいてどのような形で現れているのだろうか。両者の間に直接的な連続性を見出すことはできないだろうが、少なくともパウル・シュレーパーにおいて宇宙的に拡大した精神世界から、父の示した精神と身体の間図式がいかに変容したのかを読み解くことはできよう。

シュレーパーの神経に、天界から神や魂たちの光線がひっきりなしに到来し、際限なく語り続けるということについては、すでに述べたとおりである。しかしながら、シュレーパーの神経は、単に彼のもとへとやってくる情報を受動的に受け入れる器官であるだけではない。それは、私たちの目や耳と同様に、外界の情報をみずから集めることができるのである。私たちの目や耳は、当然のことながら、自分のごく身近にあるものごとを知覚するのみであるが、シュレーパーの神経が知覚する領域は、私たちの常識的な理解をはるかに超え、遠く宇宙空間での

²³ Ebd., S.73.

²⁴ 三井悦子「治療的な身体運動におけるからだの解放に関する考察 D.G.M.シュレーパーの『医療的室内体操』を手がかりにして」：奈良女子大学文学部『研究年報』33号（1990年）、105～125頁所収、116頁。

²⁵ モーリツ・シュレーパーは「血管のなかの血液の分配は私たちの意志力の直接的な影響を免れる」ということは自明であるが、「筋肉全体を使った、計画的で漸進的、そして合目的な練習こそが、機械的な血流のためのもっとも大切な要因である」と述べている。Schreber, D.G.M., S.113.

できごとをも感知してしまうのである。シュレーバーは、みずからの目で見て、耳で聞いた宇宙の様子をこのように記している。

他のグループを形成していたのは、おもにライプツィヒの学生団体サクソニアの元団員であった。そこに、フレックシヒ教授は準団員として参加しており、このことからわたしはフレックシヒを通じて彼らが至福を獲得したものと推測していた。さらにそのなかには、ドレスデンの弁護士 G.S.博士やライプツィヒの医学博士 S.や区裁判所長 G.のちに「カシオペアにぶら下がる者たち」と言われた多くの若い団員がいた。他方、多数の学生組合員もいて、彼らは木星、土星、天王星を占領できたほどに一時的に勢力を拡大していた。(DW 60)

シュレーバーにおいて、宇宙空間は、「カシオペアにぶら下がるものたち」や木星、土星、天王星を支配下に治めた学生組合員の跋扈する、権力闘争の場として描かれている。

シュレーバーはこういった情報を、魂たちから伝え聞いていただけでなく、自らの拡張した知覚によって受信しているのである。外部から介入する光線を自らのうちに蓄え、自ら光線を発することにより、シュレーバーの「精神の目」は発動し、宇宙全体を覆いつくす知覚となるのである。²⁶

シュレーバーの神経は、なぜ知覚可能な領域を宇宙空間にまで広げてしまったのだろうか。またなぜ、魂たちの出身地や生息地が宇宙空間なのだろうか。この問題には、シュレーバー自身が親しんだ、同時代の宇宙論、とりわけ多世界論についての言説が参考になると考えられる。当時、キルヒホフとブンゼンによって考案されたスペクトル分析²⁷——太陽などの光源からの光をプリズムによって分解し、それぞれの波長の長短から光源の原子組成を特定する方法——は、宇宙科学を飛躍的に発展させ、進化思想の流行とも相俟って、当時のドイツに宇宙論の一大ブームを巻き起こしていた。

シュレーバーが愛読書のひとつとしてあげている、カール・デュ・プレル (1839~1899) の『宇宙の発達史』(1881) は、ヘッケル流の進化思想を宇宙の歴史に応用している。

²⁶ 「精神の目」とは、光線たちとの異常な交信状態に入ったシュレーバーにおいて、通常の間人が目や耳などの五官を用いて外界の情報を得るのに対し、「光線によって頭がいわば光り輝いている」、つまり「光線によって直接的な神経系に投射」(DW 123) されることによって光や音などの刺激を受容するのだという。

²⁷ Vgl. Kirchhoff, Gustav: *Gesammelte Abhandlungen*. Leipzig 1882, S.598ff.

発達、合法則性、闘争、調和、再分裂、解決、われわれが地上の出来事から抽出したこれらすべてのカテゴリーは、ひろく恒星の領域に、類似的に拡張することができる。そして宇宙のいたるところで、あらゆる出来事の振り子は、生成と消滅との間を揺らめいているのだ。²⁸

このようにダーウィニズム的適者生存説を宇宙の惑星についても適用しようとしたデュ・プレルは、宇宙の発展段階において、大きな楕円軌道を描く惑星は太陽に取り込まれて消滅すると述べている。²⁹ デュ・プレルにおけるダーウィニズムの普遍化の背景には、宇宙と地上という二つの自然界をつなぐ、言語の一元化が見られるのである。³⁰ 同じ本のなかで、デュ・プレルは、「星たちの唯一の言葉は、スペクトル」³¹ であり、「地上と宇宙の法則の同一性」は、「近代天文学の確たる基盤である」³² と述べている。この当時の宇宙論において、最も注目すべき問題は、他の惑星に人間が住んでいるか否かということであった。イギリスのプロクターおよび、フランスのフラマリオンらを筆頭に、1860年代から1930年代ごろまで、多くの科学者や哲学者がこの問題に取り組み、彼らの言説はシュレーパーのようなディレクタント知識人にいたるまで、広く受容されていたのである。

彼らのモチベーションとなっていたのは、進化論やスペクトル分析といった科学技術上の発展であり、地球における文明の発達を他の惑星にも投影していたのだと考えられる。それは、プロクターがある天体から得られたスペクトルのなかに、金属元素が発見されたことから、金属器を用いる知的生命体がいると確信したこと³³ や、フラマリオンが火星表面の溝状の模様を、火星人が作った運河であると考えたり、³⁴ 火星表面にみえる光点が、地球に向けられた信号であると推測したり、³⁵ といった形で火星における技術文明を夢想したことからも窺え

²⁸ du Prel, Karl: *Die Entwicklungsgeschichte des Weltalls*. Leipzig 1881, S.235.

²⁹ 「それゆえわれわれは、このような推論から逃れることはできない。しばしば厚いエーテル層に到達した惑星の軌道速度は、そのうちに失われ、不可避の運命に直面せざるを得ない。すなわち、最後にはその速度はたちまち減退し、ギリシャのクロノスが自らの子供たちを飲み込んだように、太陽に飲み込まれるのだ。惑星は、自らの起源へと戻り、その輝く光球は、それらのゆりかごであったが、また墓場ともなるのである。」

Ebd., S.243.

³⁰ 宇宙進化論と地球の自然史との連続性については、拙稿「光線としての言葉—シュレーパーと自然科学と心霊学」：京都大学大学院現代文明論講座文明構造論分野『文明構造論』第1号（2005年）、23~46頁所収、29頁参照。

³¹ du Prel: S.46.

³² Ebd., S.60.

³³ Crowe, Michael J.: *The Extraterrestrial Life Debate, 1750-1900*. Mineola / New York 1999, p.372.

³⁴ 小森長生『火星の驚異』（平凡社新書 2001年）、42頁。

³⁵ カミーユ・フラマリオン『星空遍路』（武者金吉 訳）文明協会 1927年、236頁以下。

る。

こういった多世界論と不可分の関係にあったのが、生命の起源という問題である。このことについては、多くの科学者がその見解を述べてきた。当時最も支持を集めたのが、生命が隕石の衝突によって、外部の宇宙から地球へと運ばれたという説である。³⁶ しかしながら、スウェーデンの物理化学者でノーベル化学賞を受賞したスヴァンテ・アーレニウスは、このような通説に反して、金星に生息する好熱性バクテリアが太陽光線の圧力によって地球に運ばれ、発芽したという仮説を展開した。³⁷ 生命の起源と発展という発想は、シュレーバーにおいても見出すことができる。シュレーバーの神経は、神の光線によって引き抜かれ、人類滅亡後の新たな人類の胞子として使われてしまうのである。

かの「シュレーバーの精神から生まれた新たな人類」は、地上の人間に比べてはるかに小さな体格をしており、すでにともかく注目すべき文化的な段階に到達し、とりわけ彼らはその小さな身長に見合った小さな牛を飼っていた。(DW 115)

アーレニウスにおける、生命の種子としてのバクテリアは、シュレーバーにおいては神経線維の一部であり、それは神の光線という圧力によって、はるかかなたの惑星で、新たな文明を構築するのである。

この「シュレーバーの精神から生まれた新たな人類」という語についてはいくつか不可解な点がある。というのも、『回想録』全編でこの語は、合計6回出てくる³⁸ が、それぞれの箇所では意味の揺らぎが見られるのである。先の引用では、「新たな人類」の世界はすでに、あるいは現在進行形で、つくられていると読むことができるが、別の箇所では、それは神の神経との交接によって、つまりシュレーバーを母として近い将来起こる事態なのだとされている。³⁹ ここに、シュレーバーにおける時間意識の錯乱を見ることができるだろう。神との交接が終わったあとに生じた新たな人類の世界を、すでに先取りして見ているシュレーバーは、いったいどこにいるのだろうか。

³⁶ 19世紀の間に、隕石に関する書物は5000点以上にものぼったという。Crowe, p.401.

³⁷ Arrhenius, Svante: Die thermophilen Bakterien und der Strahlungsdruck der Sonne. In: *Zeitschrift für physikalische Chemie*. Bd. 130. Leipzig 1927, S.516.

³⁸ Vgl. Schreber: SS.115, 124, 177, 203, 288, 387.

³⁹ 第13章においては、このように語られている。「今となつては、それが私の気に入ろうが入るまいが、世界秩序は、有無を言わず脱男性化を求めており、それゆえ、理性的に判断すれば、女への変身という考えになじむより他に私には道が残されていないということが、疑いようもないこととして私の自覚するところとなったのである。脱男性化の結果、起こりうることはもちろん、新しい人間の創造を目的とする、神の光線による受胎のみであつた。」(DW 117)

そもそもシュレーバーの周りに集まる魂たちは、すでに死んだ人間たちである。シュレーバーにおいて神や魂たちのいる宇宙の世界は、人間の世界とは別の時間が流れる、いわば死後の世界なのかもしれない。⁴⁰

宇宙が死後の魂の世界だという発想は、もちろんシュレーバーにのみ特有のものではない。仏教に代表される、輪廻転生を教義とする宗教的世界観や、私たちが日ごろよく使う言い回し——「お父さんはお空の星になったんだよ」など——を考えれば、これはむしろ当然のことである。しかしながら問題なのは、宇宙と死後の世界との混同が、当時の多世界論者においてもまた共有されていたということである。

カミーユ・フラマリオンは、先にも述べたとおり火星を中心とする多世界論研究における最も著名な人物であったが、また心靈主義者としても知られていた。⁴¹ フラマリオンは、『精神生活の謎』において、「人間の精神的な問題と天空の問題とは、人間の魂が不滅であり、魂の将来の住処が天空であるとするれば、密接な関係を持つものとして考えられるのではないか」と述べている。⁴² この発言は、『居住世界の複数性』——この書は増刷のたびに大部になり、のちには初版の10倍もの量になっていた——においてさらに明確に展開される。

惑星は地球と同じように、人々の労働の場であり、魂たちが大きくなって徐々に学び、発達するために来るような学校であり、あこがれた知識を交互に取り入れ、このようにしてしたいに目的地へと近づいていくような場所なのだというのを私たちは知っている。⁴³

フラマリオンは、宇宙のさまざまな惑星は、のちに人間が住む場所であり、多くの居住者を持つ天の家であると考えた。彼は、世界の複数性と、魂の輪廻転生とを結び付けて考えていたのである。このような発想は、フラマリオンだけにとどまらず、ヴィクトル・ユゴーをはじめ、ペザール、フィギエらは、死後の魂は新たな肉体を得て、別の地球で暮らすようになるという

⁴⁰ シュレーバーを取り巻く魂たちは、死後の人間の神経が抜き取られ、神によって浄化を施された上で、神の住む天上界の一部とされたものである。また、入院中のシュレーバーを診る主治医のフレックシヒや看護師たちは、みな「かりそめに急ごしらえされたものたち」であり、シュレーバーの目の前から姿を消したとたん泥人形のように、無にかえってしまうと考えられていた。

⁴¹ フラマリオン（1842~1925）の代表的な著作は、『居住世界の複数性』（1862年）、『火星とその居住可能性』（1892）などであるが、心靈主義に関する本として、『精神生活の謎』（1900年）、『無意識』（1907）、『死とその神秘』（1920）などがあり、フランスの心靈主義者アラン・カルデックとの交流もあった。

⁴² Flammarion, Camille: (übersetzt von Gustav Meyrink) *Rätsel des Seelenlebens*. Stuttgart 1908, S.xviii.

⁴³ Flammarion: *La pluralité des mondes habités*. Paris 1921, p.328.

5. 不死の魂と死にゆく肉体とを結びつける神経

では、シュレーバーやフラマリオンが思い描いた宇宙空間と死後の世界の結節点はどこにあるのだろうか。望遠鏡と自然科学的な観察をもって他の惑星の知的生命体を探す多世界論と、霊視や交霊術によって死者の霊との対話を試みる彼岸思想とは、どうして両立しうるのだろうか。フラマリオンと同様、心靈主義に関する著作も多いデュ・プレルは、『神秘哲学』（1885）において、人間の感覚がいかに限定的にしか世界を捉え得ないか、ということを論じている。デュ・プレルによれば、催眠や夢遊状態における人間の魂は、他者や死者の魂とも交信しうるし、惑星の住人たちとのコミュニケーションにおいては、通常の人間の感覚は役に立たないだろうというのである。⁴⁵ 彼はフラマリオンとは異なり、直接人間の魂の輪廻転生を問題にすることはない。⁴⁶ むしろデュ・プレルにおいて重要だったのは、生きている人間の精神活動と、死者そして多世界の住人の間における共時的なつながりだったのである。それをデュ・プレルは、『死、彼岸、彼岸における生』（1899）において「現世における無意識の生は、彼岸における意識的な生である」という言葉でのべている。⁴⁷ デュ・プレルにおける死後の世界とは、あくまで人間の感覚が及ばない領域のことであり、彼は、夢や無意識の研究によって、想像によってしか測りえない、拡大した知覚の領域を夢想したのである。

このような考え方は、シュレーバーにおける現世と彼岸の關係に近いといえる。死者と語るシュレーバーはもちろん生きた人間であるし、自らもそう思っている。しかし、もはやシュレーバーにおいては、生きているということが意味を持つてはいないのではないだろうか。魂が不滅である以上、身体が生きているかどうかは問題とならないのではないかと。シュレーバー自身も、みずからの肉体の不在、あるいは「不可死性」——不死身とは違う。単に死なないので

⁴⁴ Crowe, p.410.

⁴⁵ デュ・プレルは、通常の人間の言語や感覚を「三次元的なもの」として、それ以外に「四次元的」な感覚が存在するだろうと考えていた。多世界論と心靈主義は、デュ・プレルにおいてともに、通常の人間が認識し得ない四次元的な領域として考察の対象となっていたと考えられる。du Prel: *Die Philosophie der Mystik* Leipzig 1910, S. 424. および du Prel (1881), S.359.

⁴⁶ デュ・プレルが輪廻転生的な考え方を示せるのは、むしろその宇宙論においてである。『宇宙の発達史』においてデュ・プレルは、惑星は太陽に飲み込まれ、太陽はやがて冷たくなってしまうという世界滅亡の予測を立てたが、のちに別の場所で、何らかの流星や隕石の衝突により、ふたたび太陽は熱を取り戻し、世界はよみがえると考えた。du Prel (1910), S. 345.

しかしながら、このようなデュ・プレルの主張についてアーレニウスは、嘆息はするが、物理的根拠に乏しいとしている。スヴァンテ・アーレニウス『史的に見たる科学的宇宙観の変遷』（寺田寅彦 訳）岩波文庫 1931 年、212-213 頁。

⁴⁷ du Prel, Carl: *Der Tod das Jenseits das Leben im Jenseits*. München 1899, S.87.

はない。死なないというよりむしろ、死ぬことができるのかさえ、わからないのだ——のようなものに気づかずにはいられなくなってくる。

これに関してある別の問題が浮かび上がってくる。そもそもわたしは死ぬ運命にあるのか、そして何が死因となりうるのか、ということである。わたしが神の光線の再生能力を経験したこと(これについては前の解説を参照)があるが、これらを考え合わせると、いかなる病気の影響も、暴力的な外からの介入でさえ、わたしの死ぬ原因として除外されているといわざるを得ない。(中略)

したがって、わたしにとって死因となるのは、一般に老衰といわれることだけであろうと思われる。周知のように、老衰による死がどのようなものなのかは学問的にあまりあきらかになっていない。(DW 290)

シュレーバーの身体は、光線によって傷つけられるものの、いつもふたたび修復されてしまう。自殺を図っても必ず末遂に終わる。老衰という死も、「ひょっとしたらありうるかもしれない死」(mein etwaiger Tod) (DW 290) に過ぎないのだ。死は、いつになったら来るのかもわからない。もしかしたら、すでにその瞬間を通り過ぎているのかもしれない。

…女性の身体に変えられ、そのようなものとしてその人物に引き渡されて、性的に濫用され、そして「ただ捨て置かれる」。つまり腐敗するがままに放っておかれることになっていたのだ。(DW 56)

これはシュレーバーが自らの行く末を、魂たちから伝え聞いた場面である。その人物とはもちろん神であり、シュレーバーは神の性的な慰み物として蹂躪され、死んでゆき、腐敗する人間なのだ。あるいはすでに、腐敗した死体なのかもしれない。腐敗しつつ、自らの精神から生まれた「新たな人類」を見ているのかもしれない。しかしなぜ、腐敗し、放置された死体なのだろうか。

シュレーバーはたしかに、不滅の超時間的な世界にある魂たちと交流する生活をしている。それならば、もはや自分自身の身体が死んでしまったところで、その死体など、どうなってもかまわないはずである。しかしながら、魂が取り出される源としての神経はやはり物質的な存在であり、⁴⁸ それ自体が消されることはできる限り避けられなければならないのである。そ

⁴⁸ 「魂もまた純粋に精神的なものではなく、物質的な実体、つまり神経にもとづいて存在しているのだ。そ

れゆえ、シュレーバーは『回想録』の補遺において、当時普及してきた火葬⁴⁹ に対して反対意見を述べるのである。

このような事例〔焼死した場合、死体がある程度燃え残るということ〕はそれゆえ、現代の火葬とはほとんど比べようがない。火葬とは、独自の火葬場において、途方もない熱を発生させ、大気を遮断するなどして、人間の死後にまだ残っているものを、手順に従って完全に消滅しつつし、わずかばかりの灰にしてしまうことであり、そして実際そういったことが実現されているのだ。(DW 345)

ここでシュレーバーが述べている火葬についての知識はやはり正確である。おそらくそれだけ、死後の人間の神経がどのような運命を辿るのかについて関心を持っていたということだろう。シュレーバーにおいて神経は、本人が何度も語っているように、感覚の受容器官であり、思考や記憶、その他あらゆる言語活動の器官であると同時に、どこまでも物質的な生きた人間の神経に基盤を置く「モノ」なのである。シュレーバー自身が「きわめて細いより糸にもたとえられるような繊細な構成物」(DW 6) と表現した神経。それは目に見えないほどに細いが、線ではない。あくまで三次元的な存在物として、空間的広がりや質量を備えているのだ。

彼は時間を超え、みずからの死後の世界を見ている。身の丈にあった小さな牛たちを飼う、自らの生み出した新たな人類を見ている腐乱死体シュレーバーは、いまだ死んでいない。死んでいるのかも知れないが、その神経は腐敗することなく、ぐちゃぐちゃに壊れた身体の中に、いまだ生き残っている。神経だけでも、生き延びていなければならないのだ。シュレーバーの神経とは、いったいなんなのだろうか。

通常の人間において、音や光の感覚は、ごく身近な領域に限られている。それはなにより、自分の身体の一部であるという制約を受けているからだ。目を酷使すれば、視力は弱くなるし、風邪を引いて体力が弱まれば、思考力も低下する。しかしながら、シュレーバーは神との異常な、「世界秩序に悖る」神経接続 (DW v) が始まって以後、限りなく遠くへ、それこそ光が世界をあまねく照らすように、その精神活動の領域を拡大してゆく。その一方で、彼の身体はあくまで一個の人間の身体でしかない。その現実が、たとえば病室のベッドに拘束されていよう

れゆえもし火葬で神経が完全に消滅してしまうならば、魂が至福へと昇ることも不可能になってしまうだろう。」(傍点は原著者) (DW 344)

⁴⁹ 19 世紀後半には、公衆衛生の観点から火葬を促進する動きが目立ち始めた。1856 年に、ジューメンス兄弟は直接裸火で焼くのではなく、灼熱した高熱の空気流により灰化させる再生炉型高熱炉を開発した。このジューメンス型高熱炉は、はじめイタリアで普及し、のちに 1876 年以後ドイツにも数箇所設置された。原克『モノの都市論』大修館書店 2000 年、23～26 頁。

と、彼は宇宙空間や自分の体内の様子までも見る事が可能となっていた。どこまでも、四次元的に彼の知覚可能な領域が拡大するのに対して、彼の身体はむしろ忘れられてゆく。ひとつの身体、自分だけの身体という限界が忘れられてしまえば、それはもはや不死身であろうとすでに死んでいようと同じことである。そして彼の宇宙へと肥大した精神は、忘却され死の世界へと踏み込んだ身体とふたたび結びつく。その結び目となるのが、シュレーバーの神経である。

シュレーバーにおける知覚ないし精神活動とは、とりもおさず彼の世界にあふれる言葉である。見られ、聞き取られ、考えられたものごとは、すべて神経に書き込み可能な情報として言葉へと変換される。逆に言えば、言葉へと変換可能なものが、神経に感じ取られるのである。

神経とは、すなわち、『回想録』に遍在する言葉と、痛みや病氣とともに、自分ひとりの感覚として腐敗や死を受け入れなければならない身体という対立した概念が交差し、せめぎあう場所なのである。この場所こそ、シュレーバーが死者の魂となることも、腐敗した死体となることもなく、生と死、この世とあの世の境目を生きる人間としてたどり着いた地点だったのだ。

モーリツ・シュレーバーらの体操を通じて健康を目指そうとする運動は、世紀転換期に入り、自然療法や生活改善運動などさまざまな方向へと分岐し、自然とともに生きる健全な身体像の形成へとつながった。⁵⁰ そこにあらわれたさまざまな肉体への眼差しや精神主義についてここで詳細に論じることはできないが、息子パウル・シュレーバーは、このような身体のありようとはまったく別の方向へと進んだ。しかしながら父のいう、身体の活性化を通じて身体を超越しようとする精神主義は、たしかに彼のなかにも息づいていることがわかる。シュレーバーはどこまでも拡張する精神のみならず、決して消え去ることのない両義的な存在としての神経につながりとめられた、忘却されつつもその精神を支えている身体をも発見したのだといえよう。

⁵⁰ モーリツ・シュレーバーの体操や庭園における遊戯活動などは、のちにシュレーバー協会という名の下に結社組織として全国に展開された。シュレーバー協会の主な活動は、クラインガルテンという個人の庭の集合体を形成し、そのなかで園芸活動をしたり、子供たちを自由に遊ばせることであったが、なかでもはクラインガルテンそのものをコロニー化してしまう協会支部があったり、健康増進を目的とした講演や子供祭など生活改善運動や田園教育的な運動とほとんど変わらない部分もあったと考えられる。穂鷹知美『都市と緑 近代ドイツの緑化文化』山川出版社 2004 年、および Richter, Gerhard: *Das Buch der Schreber Jugendpflege*. Leipzig 1925 参照。

Nerven als Knoten

— Kosmos und Körper bei Schreber —

KUMAGAI Tetsuya

In seinem einzigen Werk „Denkwürdigkeiten eines Nervenkranken“ hat Daniel Paul Schreber sich selbst einen „Nervenkranken“ genannt. Seine Nervenkrankheit war von der Neurose (oder Neurastenie) etwas verschieden, die für die Jahrhundertwende charakteristisch war. Für ihn waren die Nerven ein Apparat, der nicht nur äußere Eindrücke aufnimmt, sondern auch aufgenommene Informationen aufbewahrt und sogar prüft und bearbeitet. Und nach seinem Bericht dringen durch den „Nervenanhang mit den Göttern“ die Stimmen der Anderen wie Götter oder Seelen in sein Denken ein, verwirren seine Gedanken, verwunden seinen Körper und verwandeln ihn in einen weiblichen Körper.

Wie sind ihm solche Ideen über Nerven und Körper eingefallen? Es ist der Einfluß seines Vaters Daniel Gottlob Moritz Schreber, den man bei der Forschung über den Hintergrund des Denkens des Sohnes nicht außer acht lassen darf. Während man den Vater als „Sadisten“ oder „Haustyrannen mit göttlicher Machtfülle“ bezeichnet und nur seine sadistische Seite betont hat, gilt es jetzt, auf seine Gedanken über die Körpererziehung zu achten, die er als Begründer der Heilgymnastik in Deutschland geäußert hat. Moritz Schreber entdeckte den Körper, den man bisher nur für einen passiven Gegenstand der Behandlung gehalten hatte, als aktiven, den Geist aktivierenden Körper wieder. Er glaubte, daß die Einheit des Geistes und des Körpers Gesundheit bringt, und hinter diesem Gedanken können wir die sogenannte geistige Romantik deutlich erkennen, daß man auch auf den dem Willen nicht unterworfenen Teil des Körpers Einfluß nehmen könne.

Dieser Einfluß des Vaters ist, wenn auch nicht unmittelbar, in der kosmologischen Ausdehnung des Schreberschen Geistes zu sehen. Seine Nerven können auch die Vorgänge im von den normalen Sinnesorganen nicht zu spürenden Kosmos

wahrnehmen. Im Kosmos, über den er uns berichtet, streiten sich viele tote Seelen ums Leben, und da, auf einem Stern, befinden sich auch „die neuen Menschen aus Schreberschem Geist“. Sein Interesse an der Kosmologie stammt aus der damaligen Beliebtheit des sogenannten Welt-Pluralismus. Auch in vielen Diskursen dieser Welt-Pluralisten gibt es ja einen ähnlichen Zusammenhang der Seelen mit dem Kosmos: Sie dachten auch, die Bewohner anderer Welten wären tote menschliche Seelen und der Kosmos wäre der Wohnort, wir in Zukunft leben würden.

Im Zweifel am menschlichen Wahrnehmungsvermögen fließen der Welt-Pluralismus und die Welt nach dem Tod zusammen. Die Welt-Pluralisten und Spiritisten wie Carl du Prel und Camile Flammarion, die auch auf Schreber Einfluß hatten, haben bei der Erforschung von Träumen und Somnambulismen die Existenz der übermenschlichen Sinne geahnt und eine eingebilddete Phantasie-Sphäre konzipiert. Diese Konzeptionen sind denen der Beziehung zwischen Diesseits und Jenseits bei Schreber sehr ähnlich. Schreber nahm die Ereignisse im Kosmos und die Welt nach dem Tod gleichzeitig auf. Er ist schon im Leben gestorben. Er stellte sich seine eigene Leiche vor und fürchtete sich gleichzeitig vor ihrem Verschwinden durch Einäscherung. Denn das Verschwinden des Körpers bedeutete ihm die Vernichtung der Nerven. Seiner Meinung nach müssen die Nerven aufbewahrt werden und bei Göttern als ewige Seelen überleben.

Bei Schreber vergrößert sich der wahrnehmbare Bereich in kosmologischer oder vierdimensionaler Ausdehnung. Und gleichzeitig wird sein Körper vergessen und sein eigener Tod außer acht gelassen. Aber es sind doch Nerven, die Schreber ans Diesseits, d.h. an den körperlichen Bereich anknüpfen. Sie bedeuten ihm eine Kreuzung, wo sich die ungeheuren Wörter aus den „Denkwürdigkeiten“, d.h. der geistige Bereich und der Körperbereich wie Schmerzen, Qualen und Tod treffen. Jene geistige Romantik von Schrebers Vater, die den Körper immer aktivieren will, hat er in der Vorstellung seines eigenen sich grenzenlos verbreitenden Geistes aufgenommen. Schreber hat den zwar in Vergessenheit geratenen, aber nie ganz auslöschlichen Körper wiedergefunden, der mit dem Geist und den zweideutigen Nerven verbunden ist.